

医療人を育成する場と環境—兵庫県立丹波医療センターの現在地—

西崎 朗*

A Place and an Environment for Growing Medical Staff—A Current Position of Hyogo Prefectural Tamba Medical Center—
NISHISAKI Hogara

1. はじめに

兵庫県立丹波医療センター（Hyogo Prefectural Tamba Medical Center: TMC）は、2019年7月に旧柏原赤十字病院と旧兵庫県立柏原病院の再編統合によって設立した新病院である。丹波地域はかつて医療崩壊を経験したが、「医学教育で勝負する」を一つのコンセプトとし、住民・兵庫県・神戸大学の支援や病院職員一丸となった診療活動により医療再生をはたしてきた。TMCは、実臨床の場であるとともに医学教育の場にふさわしい器であることを意図して建てられている。

TMCでの医療と医学教育を「医療人を育成する場と環境」の視点から報告する。

2. TMCの位置する丹波とその環境について

兵庫県は、北は日本海、南は瀬戸内海に面しており、日本の縮図ともいえる。丹波には水別れ（みわかれ）公園があり中央分水界が走っている。丹波に降った雨は、中央分水界の北側は日本海に南側は瀬戸内海にそそぐ。TMCはこの中央分水界にほぼ接しており、中兵庫に位置し、その主たる診療医療圏は丹波医療圏である。丹波には高速道路が整備されており、京都・大阪・神戸から車であれば1時間余りでアクセスできる、いわゆる“トカイナカ”である（図1）。この地域には、丹波三宝といわれる丹波大納言小豆・丹波の黒豆・丹波の栗や、丹波の米、盛んな畜産による牛肉や牛乳など乳製品、丹波杜氏による日本酒などがあり、食材は豊富である。鹿肉料理や牡丹鍋（猪肉）などのジビエ料理もおいしい（写真1）。

メリハリの利いた四季も魅力である。丹波市の歌である「このまちと ともに」にも、積雪で景色が水墨画のようになる冬・川堤を彩るサクラに象徴される春・木々の木漏れ日に川面がきらめき夜は蛍も乱舞する夏・黄金に輝く田畑から豊かな食材が収穫される秋がうたわている。

キーワード：兵庫県立丹波医療センター、ハイブリッド・メディカル・コンプレックス、医学教育、国際化、人材育成

* 兵庫県立丹波医療センター 院長



図1 兵庫県立丹波医療センター（TMC）



写真1 丹波の食

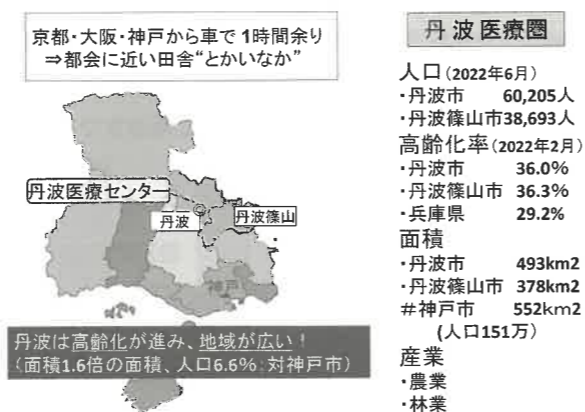


図2 TMCと丹波医療圏

丹波の四季に生まれながら医療再生に尽力してきた住民の、医療に対するまなざしも暖かい。

このような環境のなかで、医療者としても個人としても丹波の四季や食を楽しむことができる。

3. 丹波医療圏とその医療について

TMCの医療圏は丹波市と丹波篠山市からなり圏域人

口は約10万人、高齢化率は約36%と日本の縮図である兵庫県の約29%より高い。日本に将来訪れるであろう高齢者医療を、先取りして学び実践できる。丹波医療圏の課題として、人口密度の低さと広い圏域をシェアする難しさも存在する（図2）。このため、圏域内の病院や医師会との役割分担と連携は必須である。丹波市と丹波篠山市の両市に医師会があり、各医師会の診療所はかかりつけ医としての診療を中心におこなっている。一方、各々の市の拠点病院として、丹波市にはTMCが、丹波篠山市には兵庫医大ささやま医療センター（Hyogo College of Medicine, Sasayama Medical Center: SMC）がある。SMCは、総合診療やリハビリテーションを中心とした診療を担っている。丹波圏域や近隣の医療圏で発生した患者に、より専門的な診療を必要とする場合は、主としてTMCがその診療を担ってきた。

世界的パンデミックとなったCOVID-19に関しても、一般診療と同様にSMCが診断やトリアージとともに軽症・中等症Ⅰの入院を、TMCが中等症Ⅱや重症の入院に対応してきた。さらに、TMCは2類感染症の対応病床である感染症病棟を持つ県立病院として、第1波から兵庫県内のCOVID-19患者に対し県下全体の広域対応も担った。

4. 兵庫県立丹波医療センター(TMC)について

TMCは現在27診療科約80名の常勤医を含む約700名の職員が従事している。急性期病棟に加え緩和病棟・回復期病棟をもつケアミックスの病院である。

2022年4月から回復期リハビリ病棟45床がオープンしフルオープンとなった。リハビリテーションルームと連動し、リハビリテーションを積極的に行っている（写真2）。リハビリの力で、ひとが従来の機能を回復していく過程は感動的ですからある。

従来、総合内科・循環器内科・消化器内科・一般外科（消化器外科）・整形外科・小児科・産婦人科を中心とした医療を行っていたが、新病院となって、呼吸器内科・血液内科・脳神経外科・脳神経内科に常勤医が赴任した。このため、血液疾患や呼吸器疾患の精査・加療をより専門的かつタイムリーに施行することが可能となった。また脳血管疾患に対する救急医療が充実し、TMCの中でほぼ完結できるようになった。このような各科の充実に伴い専攻医も増加し、“なんでも診る”精神で積極的な診療を行っている。

TMCは、地域医療支援病院、地域がん連携拠点病院、救急拠点病院、災害拠点病院に指定されている。



リハビリテーション 和室の生活にも対応
写真2 リハビリテーションルーム



原則個室 デイルームからテラスを望む
写真3 緩和ケア病棟



柱には災害対応用のアウトレット
(酸素、空気、吸引用配管)が埋め込まれている
写真4 光彩も鮮やかな玄関ホール

2013年に地域医療を担う兵庫県養成医1名がTMCの前身である兵庫県立柏原病院に初めて赴任したことを皮切りに、現在兵庫県養成医は18名となっており地域医療推進の原動力の一つになっている。

がん診療も、前述の診療科のほか、泌尿器科を加えた各科の充実で、多様な癌腫に対して専門的な医療を提供できるようになった。また、緩和ケア病棟は22床あり、原則個室で、終末期を十分なケアの中で、落ち着いて過ごせるように配慮されている（写真3）。

救急医療に関しては、救急外来は広いスペースを持ち、また陰圧室もあり感染症対応も可能となっている。また、玄関ホールの柱には災害用アウトレット（酸素管、吸引管）が埋め込まれており、同ホールでの災害時のトリアージや診療支援などが可能である（写真4）。

5. ハイブリッド・メディカル・コンプレックス (HMC) について

TMCには、同一敷地内に隣接して丹波市健康センター ミルネと丹波市立看護専門学校(丹波看専)があり、ハイブリッド・メディカル・コンプレックス (hybrid medical complex;HMC) を形成している(写真5)。

ミルネには健診部門と外来部門があり、外来部門ではTMCの初期研修医・専攻医の外来研修も行っている。ここでの外来研修は大変教育的であり、複数の阪神間の病院から研修依頼がある。また、訪問診療や訪問看護も行っており、在宅での診療や介護サポートのニーズにもこたえている(写真6)。兵庫県立病院のなかで訪問診療を行っているのは当院のみであり、丹波での訪問診療が一つのモデルになればと考えている。

このようにHMCでは、高度急性期・回復期の医療から緩和ケアや訪問診療まで、地域医療の研修に必要なほぼすべてを網羅しており、地域医療のeverything providerとしての機能を発揮している(図3)。

丹波看専は丹波市中心に広く学生を受け入れ、TMCを拠点に実習を行っている。その教育や実習にはTMCの職員の多くが関わっている。卒業後はTMCでの勤務を望む者も多い。丹波看専の体育館は、新型コロナウイルスワクチンの集団接種会場としても活用され、また、国家的プロジェクトである「コグニケア」の実践の場となっている。これは、認知症予防のプロジェクトで、マルチタスクを同時に行う(頭で考えながら体を動かす)ことで、頭と体の活性化を促し、認知症を予防し、健康寿命の延伸を図るものである。TMCのMRIも活用し、より客観的な評価を行なっている。結果が楽しみである。

6. 人材育成について

すでに述べたように、TMCでは若手医療者の教育をミッションの一つとしている。指導的立場にいる先輩の医療者は、きわめて教育マインドに富み、できるだけ若手に実践の機会を与えるとともに、丁寧なバックアップも行っている。

外科系は、教育能力の高い指導医による目配りの利く距離感での指導で、人気の研修病院となっている。

内科は、「内科は一つ」の精神で何でも診る研修を行ってきた。内科領域の広さと深さを実感でき、かつ常に幅広い知識を動員して診療にあたるため深みのある知識の定着が可能となっている。さらに最近、内科の各領域別の指導医が増加しており、専門領域の知識習得や実践ができるよう配慮した研修に発展してきている。



丹波市健康センター ミルネ(右前)や丹波市立看護専門学校(右奥)と融合しハイブリッド・メディカル・コンプレックス(HMC)を形成。丹波の自然に映え、中央の健康広場にはメモリアルツリー(県樹くすのき)がみえる。
写真5 兵庫県立丹波医療センター外観



写真6 HMCからの訪問診療

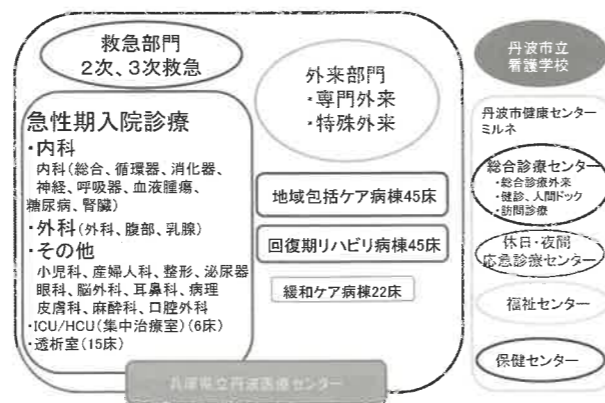


図3 HMC - only one & all in one を目指して

医学教育のアウトカムの指標として、初期研修医にはJAMEPの臨床能力試験にトライしてもらっているが、全国でベスト10に入ったこともある。また、学会活動も積極的に行い内科学会総会では若手医師が優秀演題賞



学生実習時に学ぶスペース
宿泊も可能である。

実習症例で
学生発表賞を受賞

写真7 学生控室と医学生の学会発表



正面
(左:一般保育、右:病児保育)

保育所遠景
(丹波の自然を背景に)

写真8 病院併設保育所



写真9 コスタリカから3名の女性医師が丹波医療センターで研修

を受賞してきた。研修医数は多くはないが、2022年の内科学会近畿支部例会での発表数は、兵庫県でベスト3となっており、若手奨励賞最優秀賞や優秀賞をたびたび受賞している。また医学生の学生実習も積極的に受け入れており、院内に宿泊施設も用意している。医師と同様の環境で学ぶことにより、医学生による学会発表にもつながっている(写真7)。

男女共同参画も課題の一つである。一つの対策として保育所を併設している。この保育所は病児保育も受け入れており、女性の医療者のみならず、男性の医療者にも好評である(写真8)。医療者の多様な働き方やキャリア形成にコミットしていく必要がある。

7. 国際化について

丹波地域の診療データによる国際学会での発表に加え、近年、英文論文作成数が増加している。研修医の研鑽を指導医のサポートが後押ししている。

国際化の観点からは、当院の臨床助手であった南アフリカ出身のノエル先生が、漢字の習得に苦労しつつも日本の医師国家試験に合格したことは大変うれしいことであった。現在、TMCの初期研修医として研修中である。

また総合診療専門医コース(責任者:見坂恒明医師)では、国際化の一環として国際人材の研修も行っており、2018年と2020年にスペイン・オーストラリア・コスタリカから計5名の医師が短期研修を受けた(写真9)。現在、新型コロナの影響で休止しているが、再開が期待される。研修後の医師とも交流があり、今後オーストラリアとは、交換留学制度を模索しつつある。

8. おわりに

見学に来た医学生・看護学生などは、清潔感があり機能的な施設に驚きの声を上げることも多い。TMCは若手の医療者の集う施設に変貌してきた。その中で、患者を中心にした多職種チームによるチーム医療を実践している。

メディカルスタッフがともに教え学ぶ「丹波の医療」の教育と実践の場として、この新たな建物の魅力をさらに引きだし、住民の方々に病院の理念の一つでもある「世界水準の医療」を提供していきたい。

本稿に関する開示すべきCOIはありません。